

枝もの花木

ヒガンざくらの栽培

福島県農政部農業改良課
専門技術員

新 田 齊

はじめに

枝もの花木は全国的な需要の伸びに伴い、各地に盛んになっている。本県でも花き振興計画により、中通り山間地域を中心に枝もの花木の産地育成が進められ、その中心がヒガンざくらである。

栽培は比較的所要労力が少ない。冷涼地ほど早期出荷が可能であり、優品生産が出来る。冬期間の施設利用では、小面積の施設で大面積の枝もの促成が可能であるなどの長所がある半面、出荷までに年月を要する。土地生産性が低いなどの短所はあるが、広大な山間地利用ができるとともに、冬期間の労力消化に対応できるなど、東北地方では注目される品目の一つである。

こゝにヒガンざくらの栽培技術について、今まで県内を巡回して感じた2-3について述べてみたい。

1. ヒガンざくらの系統

切枝用サクラとして、ヒガンざくらが最も多く利用されている。本県のサクラもこれが中心である。大別すると一重咲性と八重咲性がある。切枝用としては、枝の伸びがよく、立性である。枝に弾力性があり、枝の先端まで着蕾する。花色が濃

く、つぼみが上向きに着生するもの等が選抜の対象になる。

県内では福島市渡利地区が大正末期から栽培され、県内の指導的産地となっている。

この地区を中心としたヒガンざくらの主な系統を表1に示したが、それぞれにかなりの変異があることがわかる。

栽培の歴史もあり、各地から苗木の導入が計られ、切枝に向く系統の選抜がくりかえされてきたものと思われる。

現地では一重咲では、①~②良品とされ、増殖が計られているが、③、④は問題があるとされている。⑤は市内に原木があり、エドヒガンに近い系統と思われ、花色が最も濃く、以前は切枝として出荷されていたが、小枝が折れやすく、花芽の着生密度に難点があるとされている。

ざくらは永年作物であるので、優良系統の導入に心がけてゆかなければならない。

2. 繁殖について

ヒガンざくらの繁殖は実用的には、ほとんどが接木繁殖であったが、近年ミスト利用・密閉さしなどにより、さし木繁殖が可能になって来た。

表2~3は(次頁参照)八重咲性ヒガンざくらの結果である。緑枝ざしが効果的であり、ミストざしでは25~30日で砂上げ出来る。穂木は伸びのよい充実した新梢がよく、天ざし、茎ざしいずれでもよいが、天ざしの方が活着率が良いようである。

さし木時期は6月から8月まで活着しており、

昭48 福島市渡利地区を中心とした調査結果

系統	項目	樹皮の色 枝の太さ	枝の伸び	花芽の着生 密度	花の色	花の開 き方	花弁 数	萼筒 の向き	子房と花柱 の毛の有無
一重咲①	①	灰白色 細い	立性 中	密	やや濃い ピンク	平開	5枚	斜上	花柱の基部 に一部有
	②	" 極細い	" 良	"	濃い ピンク	カップ 咲	"	"	"
	③	赤褐色 中	やや横張り 中	粗	うすい ピンク	平開	"	斜下	無し
	④	灰白色 中	"	密	濃い ピンク	"	"	"	花柱の基部 に有
	⑤	暗褐色 中	"	やや粗	濃赤色	カップ 咲	"	斜上	有
八重咲①	①	暗褐色 中	やや横張り 中	密	濃赤色	半開	12	斜上	花柱に有
	②	灰白色 細い	"	粗	濃い ピンク	半開	19	"	"
東海ザクラ		赤褐色 太	立性 中	粗	ピンク 中心部濃い	"	5	"	無し

表1 切枝用ヒガンざくらの系統

表2 ミスト利用によるヒガンざくらの緑枝さしによる発根割合 (昭46・福島県園試いわき支場)

さし木 期間	発根率		発根数	
	無処理	ルートン処理	無処理	ルートン処理
月日 月日	%	%	本	本
6.14~8.12	90.0	66.5	8.7	8.9
7.17~8.12	97.5	97.5	11.3	13.8
8.17~9.12	77.5	92.5	7.0	9.0
平均	91.7	88.5	8.5	9.0

穂木 10cm 天さし, さし床, 山砂箱さし

表3 密閉さし木法によるヒガンざくらの緑枝さしによる発根割合 (昭48・福島県園試いわき支場)

項目	5.22	6.22	7.23	8.22	9.26
発根率	%	%	%	%	%
1本あたり	本	本	本	本	本
根数	8.9	9.1	17.8	21.7	0

穂木新梢 5~7cm, 4~5枚着葉調整, さし木 山砂7cm
トンネル状にビニール被覆, ヨシズ張り, かん水 週1回, 調査 さし木約3カ月

表4 ヒガンざくらの緑枝さし苗の成育量 (昭48・福島県園試いわき支場)

草丈	幹径	分枝数	地上部重	地下部重
cm	mm	本	g	g
106.6	15	11.3	608	68

8月 さし木 無加温ハウスで越冬
6月 株間15cm植付 12月 調査

かなり巾のあるものと考えられる。

さし木後の生育もよく、一年目で1m以上に生育し、2年目には立派な苗木となる。育苗期間は接木よりやや短縮出来る。

3. 肥培管理

枝も花木の施肥量についての研究は非常に少なく、ほとんどが農家の慣行による場合が多い。

しかし、定期的に枝の大部分を切り取り、切枝の量が経営に大きく影響するものである。枝の伸びが悪く、樹勢が衰えれば、それだけ経済寿命も短くなる。積極的な施肥管理が必要であろう。

さくらは定植約4~5年で第1回の切枝を始

表5 標高差が促成開花に及ぼす影響 (昭47・群馬県園試)

切枝月日	致花日数 (入室から50%開花)						開花率 (%)			
	12/8	12/17	12/27	1/7	1/17	1/27	12/8	12/17	12/27	1/27
M	日	日	日	日	日	日	%	%	%	%
900	32	28	26	21	17	13	85.6	84.6	72.1	94.7
700	34	30	28	23	17	13	58.5	66.4	63.8	97.5
450	—	38	36	25	19	15	40.7	55.4	48.7	87.3
300	—	38	—	27	19	15	23.6	52.4	32.6	96.3
125	—	—	—	29	23	17	13.3	12.6	41.8	91.3

切枝後5日間水揚, 夜温15°Cガラス室, 脱色前まで日中遮光

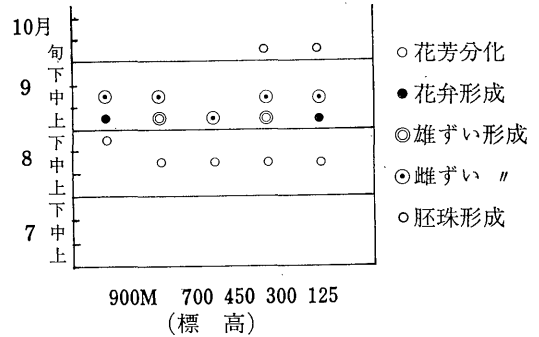
め、以後3~4年ごとに切枝する。施肥量もこのサイクルに合わせる必要がある。

慣行では比較的低濃度の化成肥料(8・8・8)が利用され、1年目に10a当たり20kg, 2~3年に40kg, 4~5年に60kg程度が施されている。

4. 花芽分化期と促成

ヒガンざくらの花芽は本年枝の新梢に8月中旬頃から始まり、9月下旬にはほぼ完成する。群馬県園芸試験場の花岡氏によれば、図1および表5に見られるように、標高差による生態的特性は高標高ほど生育は遅れ、枝も未熟に感じられる。しかし、花芽分化はや遅れで始まるが、その後の

図1 ヒガンざくらの標高差と花芽分化 (昭47・群馬県園試)



花芽の發育は急速にすすみ、早期から開花率がよく、促成日数も短縮する。

図2は群馬(前橋125M, 羽根尾700M)と福島(須賀川245M)の月別平均気温である。須賀川の気温は前橋と羽根尾のほぼ中間である。

本県の中通り山間地帯は標高250~500Mの地帯であり、促成の可能な時期は1月中旬以後と考えられる。標高69Mの福島市渡利では、経験的に促成感度の良い東海ざくらは1月上旬から、ヒガンざくらは1月下旬から2月上旬を、入室限界としている。

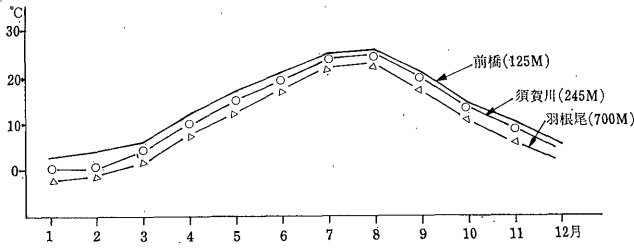
促成方法であるが、これには次のように、

① 切枝結束—水揚—土ムロ入れ—色付—温室—冷室—出荷

② 切枝結束—水揚—温室—冷室—出荷

の2方式があるが、福島では土ムロ併用温室がほとんどであったため、土ムロからの出し入れの労力、着色技術などの問題が

図2 前橋・羽根尾および須賀川の月別平均気温



はかなり低温であったが、温室に比較して3~5日開花が早まっている。これは室内の湿度が関係したものと考えられる。

しかし、温室でも15日前後の入室期間で開花しており、品質的にもほとんど差がなかった。

シリンジによる湿度調節、温度操作

あった。

昨年、現場に一部温室方式の施設が出来たのを機会に、今春、両者の比較を試みた結果を表6・7に示した。

農家の施設での調査のため、管理等の差もあ

表7 温室および土ムロ併用温度の時期別入室期間

項目	温 室		土ムロ併用温度	
	入室期間	入室日数	入室期間	入室日数
東海ザクラ	1.10~#26	16	1.10~#28	18
ヒガンザクラ	1.30~2.17	18	2.10~#23	13
〃	2.8~#23	15	#13~#26	13
〃	2.15~3.2	15	#25~3.9	12

表6 温室および土ムロ併用温室の温湿度差

項目		室 温				室 内 湿 度			
		1月11~15日	16~20日	21~25日	26~31日	1月11~15日	16~20日	21~25日	26~31日
温 室	平均	10.5	10.5	10.6	11.0	70	59	63	63
	Mx	13.8	14.6	14.2	15.0	90	80	87	92
	Mi	6.3	6.4	7.0	6.9	49	37	39	34
土ムロ併用温室	平均	7.3	6.8	8.9	7.1	83	85	85	81
	Mx	14.0	13.4	15.6	12.8	99	99	99	99
	Mi	0.5	1.0	2.2	1.4	66	72	70	62

※MX 最高温度の平均 Mi 最低温度の平均

り、十分とは言えないが、土ムロ併用温室は温度差が大きく、高湿度で経過しているが、温室は逆の傾向を示している。入室期間は土ムロ併用温室

等により、ほぼ同程度の促成が出来るものと思われる。土ムロの出入労力、色つけの技術的問題等からも、温室方式への移向が考えられる。

米国の農産物収穫悪化

米国農務省が11月8日発表した1日現在の主要農産物の収穫予想は、9月初めの早害と10月初めの霜害のため、10月1日現在の予想より更に悪化した。

△トウモロコシ…46億2,100万ブッシェル(10月1日現在比2%減, 昨年実績比8%減)

△コウリヤン…6億900万ブッシェル(10月1日現在比4%減, 昨年実績比35%減)

△飼料穀物全体(トウモロコシ, コウリヤン, ライ麦, 大麦)…1億6,500万トン(10月1日現在比2%減

昨年実績比20%減)

△大豆…12億4,400万ブッシェル(10月1日現在比1%減, 昨年実績比3億2,300万ブッシェル減)

△綿花…1,210万俵(10月1日現在比6%減, 昨年実績比7%減)

△タネ油…4,440万トン(10月1日現在比2%減, 昨年実績比8%減)

△テン菜…2,239万トン(10月1日現在比3%減, 昨年実績比9%減)

△砂糖キビ…2,534万トン(10月1日現在比1%減, 昨年実績比2%減)